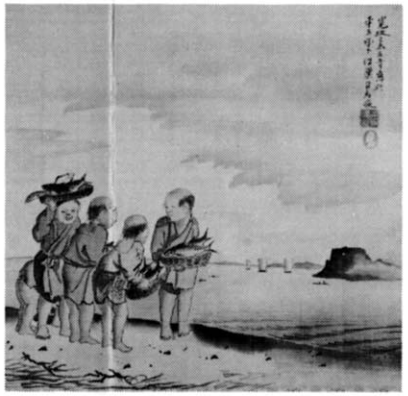
# 美術随想(7)
## 江漢画の里帰り

大和文華館館長 石 澤 正 男



大和文華館の昭和48年度購入美術品のうちに東山第一樓勝会書画帖というのがあります。それは近江の富豪で文人墨客のパトロンであった中井家の当主文寿のために彼と親交のあった文雅の道に秀でた58人が寛政十一年(1799A.D.)六月四日、京都東山の料亭華洛庵に集り書画会を催した時、文寿の需に応じて作られた書画帖であります。作品は小品ではありますが、当時の京洛における知名の人々の手になるものだけに、単に作品としてばかりでなく、彼等の交友を知る上にも好資料であります。華洛庵は東山の最も景勝の地にあったため東山第一樓の名で知られ、多くの文雅の士の集る恰好な料亭でした。

この書画帖は画は36人、書は22人の作品が納められていました。それらの大半は四月六日の書画会の席上で揮毫されたものですが、題字、序文、跋文と問題の江漢画は帖に仕立てられる際につけ加えられたものと思われます。筆者は合計58人の多数に及び、多くの有名人を含んでおりますが、それについては他日「大和文華」誌上でお伝えする予定でおりますので、ここでは省略します。

問題は当館がこの書画帖を購入した時にはかってこの帖に納められていた司馬江漢筆海浜漁夫図(写真参照)は帖から剝がされて掛物に仕立てられ、私もよく存じあげているニューヨークの熱心な日本美術収集家バーク家の有に帰しているということを、かねがね江漢研究に専念していた当館の成瀬不二雄学芸部長が知っておりました。彼の意見によるとその江漢画は小品(絹本着色30.7×31.0cm)ながら「寛政己未夏五月写於平安城下 江漢司馬峻」の款記と白文方印の「司馬峻」とその下に他の江漢作品に用例の見当らない人物の横顔を白抜きにした印が捺してあり、江漢画の研究には中々貴重な作例であるとのことです。

ところが思いがけなく一昨年秋、ニューヨークのメトロポリタン美術館が異例な催しとして個人コレクションであるバーク・コレクションの日本美術を同館の極東部で公開することとなり、私にも公開に先立つ特別鑑賞会の御招待状が届きました。私としては数年前始めてバーク家に招待されたことがあります。その時は丁度同家の内部を大改装されたあとで、掛物は床の間風に仕切られたところに懸け、屏風は立ったままでよく見られるように台を設ける、といった工合で、外国では、殊に個人の邸宅では珍しく日本調を感じさせられる展示法に、バーク夫妻が日本美術の鑑賞に実に繊細な心遣いを示されているのに感心したものでした。その後バーク・コレクションは急激に所蔵品が増加しているということを仄聞していましたので、是非この機会に拝見したいと思い久しぶりに渡米しました。

特別鑑賞会は11月6日の6時からでした。会場を一巡して先ず第一に驚いたことには、よくも僅か約10年間にこれほど厖大な日本美術品を集収されたということでした。しかも総体的に内容が充実している点です。コロンビア大学で長らく日本美術史の講義を担当されている村瀬実恵子博士の入念な解説のある図録もすでに会場で売られていました。この図録はコレクションを四部に分け、第一部は宗教的・世俗的古典美術、第二部は室町水墨画、第三部は桃山障屏画、光琳派その他の彩色画、第四部が十八・十九世紀の巨匠の作品となっています。全体として絵画が多いのは当然ですが彫刻、工芸もまたかなり含まれております。ここではもっと詳しく内容に触れる余裕はありませんが、招待客は米国内はいうに及ばず、欧州や日本からも多数旧知の人々の顔が見え、お互いに旧交を温めあっている情景はほほえましいものがありました。ただ誠に残念であったのは、この日の到来を待ちに待っておられた主人役のジャクソンさんがその春長逝されたことでした。

この展覧会はバーク・コレクションの全体から選択されたもので、その中に江漢画が含まれていなかったのは、こちらにとっては好運でした。昨年春バーク夫人が来日された機会に、不躾とは思いましたが、東山第一樓勝会書画帖の内容を当初の完璧なものにしたいので、江漢画の譲渡をお願いしたところ夫人は即座に快諾して下され、最近手続も済み江漢画の里帰りが実現したのであります。ここにメアリ・バーク夫人の温い御好意と深い御理解に対して心から敬意と感謝の意を表しそれを記録に留めておくことにした次第です。

(52.4.4記)

挿図は、江漢筆海浜漁夫図(左)渡辺南岳筆亀図(本文中の書画帖より)(右)

季刊 美のたより No.39
昭和52年5月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.